

はじめに

2006年3月にほぼ6年振りに訪れたフィジーでの *P. schmeltzii* 調査では、取り敢えずチョウの良好な訪花動画を写すという成果はあったものの、幼生期の調査という点では食草の本命と目していたナンヨウアワダシが実は移入植物であると土地の人から聞かされ、完全に振り出しに戻ってしまった。よって次に出掛ける9月までにまず同地のミカン科植物を洗い直す必要があったが、今回の救世主となって下さったのは勝木 俊雄先生である。勝木先生に最初にお会い出来たのは6月末の事前学習会の時で、別れ際にフィジーのミカン科植物に関して何か文献があったら紹介して下さいとお願いした。そして数日後に届けられた分厚いリコピーの束を見て、私は愕然となった。それによると、フィジーからはミカン科植物が移入種も含めて何と12属32種も記録されており、その中にはサンショウ属やゴシュユ属といった、私ならまず見落とす筈のない植物群の種も相当数含まれていたのである。これらの植物はもともと数が相当少ない様で、私が今まで調査に入ったような集落周辺の樹林=二次林からは遠の昔に絶滅してしまった可能性がある。よってこうした植物を調べようと思ったら、ビチレブ島なら相当奥地か、或いはこの島より原生林が良く残っている小島に出掛ける必要がありそうだと感じた。

一方 *P. schmeltzii* に関しては意外なところに情報が転がっていた。実はフィジーでは2004年9月にこのチョウの記念切手シートが発売されたが、その解説が <http://www.stampsfiji.com/stamps/swallowtail/> にあったのである。それによると“*P. schmeltzii* is uncommon is(← inの間違いか?) most areas of the larger islands however it is reported to be abundant on the Western side of VitiLevu and very common on VanuaBalavu in the Lau group.”というので、ビチレブ島の西側に多産するというのは、私の今までの観察結果と食い違う。ただしシンガトカ及びシンガトガ川は島の中心よりは西側なので、そういう意味では正しいかも知れない。一方もう一つの多産地として紹介されている VanuaBaravu 島はフィジー最東方地区にあり、流石にこんな所への行き方は結局出発前には判らなかつた。また切手の図案には幼虫や蛹の絵もあったが、HPではこの点については“*Its host plant has not yet been identified but is probably a native citrus related species. ... It has been suggested in ROBINSON'S 『MACROLEPIDOPETRA OF FIJI AND ROTUMA』 that P. schmeltzii larva may feed on Micromelum minutum, or Schefflera vitiensis but this has not been confirmed.*”となっており、描かれた幼生期の図は他の *Papilio* の幼生期で胡麻化した可能性が感じられた。ただ少々疑問なのは、ここで食草の候補の一つに挙がっている *S. vitiensis* が、勝木先生から頂いた文献のリコピーには無かつた事で、ここで私は正体不明の植物を抱え込む事になってしまった。ちなみに1869年に Gottlieb August Wilhelm Herrich-Schaeffer によって得られた本種の最古の標本は1945年のドレスデン空爆により焼失してしまったそうである。

以上の諸点を考慮して、今回も調査地区はシンガトカ川中流域のタワタワンジ集落周辺とクラエコパークに絞る事にした。一方 USP の先生方との意見交換会は、本来は学生実習終了後の12日午後に設定されていたが、私は研究所の事情でどうしても11日に帰国する必要があり、萩谷先生に実習後半の8日~10日午前中はまたまた単独行動とし、8日14時から取り敢えず私だけで USP の WINDER 先生と会談する様に取り計らっていただいた。無理を聞いて下さった萩谷先生に感謝する。

9月1日~9月2日: まずは準備?運動

今回の渡航は直前までバタバタのし通しで、旅程の最終確認が出来たのが8月29日(しかもこの時点でも9

月 8 日～10 日の移動手段や宿舎は未定のまま)、持ち物の準備に入れたのは 8 月 30 日の深夜、そして 31 日は予め 15 時に帰らせてもらう筈が、何だかんだと仕事を押しつけられて職場を出たのが 15:15、チョウの飼育場に行って留守をお願いするパートさんとの打ち合わせが終わったのが 15:35、普通に車で走れば約 15 分かかかる宿舎までの道を 10 分で飛ばして駐車場に車を入れ、予め車に積んでおいた旅行鞆を持って、これまた普通に歩けば 7 分かかかるバス停まで 4 分で走破し、15:50 つくばセンター発成田空港行きバスに飛び乗った。後は無事故で行ってくれるのを祈るのみだった(3 月の時はこのバスの走路上で事故が発生し、機転を効かせた運転手の別路走破によってどうにか間に合った)が、普段より道が空いていて予想より早く定刻 17:30 に成田空港に到着してしまう。エアパシフィックのカウンター前で寺阪氏(実はこれが初対面)から航空券の受け渡しと保険の最終確認を行う筈が、同氏らしき人物はおらず。私が遅れる事を見越してどこかに行ったようだ。20 分程探し回ったが判らないので呼び出しをかけてもらう。程なくして現れた同氏から航空券を受け取って無事搭乗手続完了。ではということで、私は搭乗開始時刻+15 分まで、例によってクレジットカードホルダーラウンジで休む事にする。時間になったので搭乗口へ移動開始したが、何と 3 月に続いて今日も丁度サテライトターミナルへ移動するシャトル乗場で呼び出しを食ってしまった。出発時刻まではまだ 15 分以上もあり、この時間からこんな放送を入れるとは、今日も機内はカラッポだなと直感した。案の定で 3 月に続きエコノミークラスでスーパーシート気分となる。ただし今日はどうも気流がかなり悪い様で、夕食、朝食共に機体の揺れの為に配給が幾度か中断・一時お預けとなった。

着いた先のナンディ空港では、機外へ出ても前 2 回のような熱気ではなく心地よい風が出迎えた。入国審査・税関共に無事通過させてもらえた。恐らく萩谷先生と一緒になければ、私の大荷物には必ず難癖がついたであろう。事実、2000 年に来た時には中身を調べられ、うっかりして鞆の中のケースに入れたまま持ってきた同年 1 月にメキシコで拾った?チョウの遺体に『野生生物搬入禁止条項』が適応され、帰国日まで空港内に預け出す破目になった。空き時間に空港内のツアーデスクに行ってみたが、ここでも VanuaBalavu 行きに関して有益な情報はなし。ATS の谷さんからも海路は定期便があるが時間がかかり過ぎるかもという厳しい指摘を受けた。到着した ATS 系の観光バスに乗ってこの日の宿=モキャンボに移動。かなり早い時間から部屋に通させてくれた。早速、敷地内のチョウの撮影に掛かる。キチョウ、ウスキシロチョウ、シルビアシジミ、ホリイコシジミ、リュウキュウムラサキ、ウスイロコノマチョウ等の常連さんに加え、後翅後角部に眼状紋を 2 つ付けた見た事もないアマミウラナシジミ系のチョウ(右図)を撮影。これの名前調べには少々時間がかかりそうだ。午後を少し過ぎてから最寄りのマーケットで少々買い物。1 日目はこれで活動終了。



2 日目は午前中 INOKE さんの講演を拝聴した後、昼食無視で昨日に続き庭でチョウの撮り増し。シルビアシジミは大勢集まってきてセンダングサ類で吸蜜しているが、ここでは少数派のホリイコシジミはこの花にうまく着地できないようで、花の上で足を滑らせてじたばたする個体多数。結局彼等は別の花を訪れていた。センダングサ類にはキチョウも来ていた。そうこうするうち予定より遅れてやってきた観光バスで、みんなと一緒にクロウズネストに移動。やはりフィジアンリゾート手前の『海が見える峠』を境に植生が変化するのを確認できた。私はシンガトカのマーケットには寄らずに宿に直行。しかしこの日は風が相当強く、浜辺の草地のチョウも飛んでいなかったので、本日のここでの撮影は中止し、明日以降に備える事にした。

なお今回は単独行動の8~9日以外は佐藤先生、勝木先生と同部屋だったが、このお2方、特に佐藤先生の料理の腕前には驚異した。この日はぼさっとしているのも悪いと思い、せめて野菜切り位は手伝おうと折り畳み式の小型サバイバルナイフを無理して使ったのが災いし、あっという間に流血の惨事発生、俎から切りかけのタマネギから血染めにしてリタイヤ。結局これ以降は夕食・朝食共に、完全にお2方の世話になってしまった。

9月3日: クロウズネスト+クラエコパーク 基礎だよ! ○○君!!

朝から好天気で、海岸の観察会は予定通り。ただし少し準備に手間取った私が海岸に出て見たのは、既に両足の膝くらいまでを浸水させた同行者。本来の目的と、ビデオカメラの保全を考えるとこれには付き合えず、陸の上からみんなの姿を遠望しつつ、合間にチョウの絵を撮る。海岸のマメ科草本の間をシルビアシジミ(右図)が飛び交っている。ところがこの3月には沢山いたオナガウラナミシジミ系のチョウがいない。このチョウが良く来ていた濃紅紫色の花は今日も咲いているのに、どうしたのだろうか?



昼過ぎからはUSP組を待つべくクロウズネスト前の道(これがクイーンズロードの旧本道とは今回初めて知った)を行きつ戻りつしながらチョウを探す。ホテル敷地の東隣に叢があった。鉄線で仕切られているが入れないかと思っていたら、中から人が出て来た。彼の行動を観察し、逆コースで易々と進入する。思った通り中にはリュウキュウムラサキやシジミ類、そして前回3月に来た時には見れなかったイワサキコノハがいた。なかなか旨い位置に来なかったが、何かV撮。本種とリュウムラは森林と草原の境界線上で生活するチョウの代表格で、ここはちょうどそうした環境。その他、予想通り?カレーブッシュ観察。

13:45になり、一旦ホテル前に戻ったら、萩谷先生が車で出掛けるところだった。USP組の宿泊先でトラブルがあって応援に行くらしい。ということは夕方までは彼らとの顔合わせは無いなと踏んでクラエコパークへ出掛けた。入り口でエントランスホールが変わっている事に気付く。更に庭の一部を潰して新しい建物を作っているようだ。しかし従業員からは『また来てくれたんですか!』と歓迎を受け、チョウの溜まり場にも案内してもらった。時間が遅かったために、黒色マダラや草原性のチョウはそこそこ飛んでいたもののアゲハの姿はなし。ただし2種の黒色マダラがとある植物の花で束になって吸蜜している場面(右図)に出会い、これは面白い絵が撮れた。



15:30にここを出てクロウズネストへの帰途につく。途中のピザハウスの前辺りを歩いていたら、海岸を軍団がこちらに歩いて来る。こんな場所をこの時間にどこのどいつらがと良く見たら何と萩谷先生一行である。USPの宿舎にいくつもりと直感、私もこのまま行く事にしたが、いきなりみんなの前へ出るのも面白くないので、一旦、道で待って彼らをやり過ごし、後から彼らを撮影しながら浜辺をこっそり付いていく事にし

た。そのうち誰かが気付くだろうと思ったが、何とした事か誰も後ろを振り向かない(知らない場所を歩いている時には、時々後ろを振り返って帰りを見るであろう景色を予習しておく。これは後方からの危険を察知する意味もあり、サバイバルの基本!!)。遂に本隊は目的地へ向けての最後コーナーを回り、このままでは私は遅刻者の汚名を着せられる。仕方なく海岸から急遽バス道へ上がり、先回りしてみんなを出迎えた。行った先では全員自己紹介。終了後は先発組としてホテルへ戻る事にしたが、途中で勝木先生からカレブッシュを見たいと言われ、昼に入り込んだ叢に案内、若干暗くなっていたが、きっちり観察して頂けた。

9月4日～7日：タワタワンジ村周辺にて ムチョウは居るけれど…

この間は、基本的に勝木先生と一緒に行動させて貰った。まず4日はコロニサガンナ村でのセブセブの後、タワタワンジ集落へ移動。道端などには黄色い小さな5弁花を付ける矮小木本が沢山あって、花にはホレイコシジミ(右図)が群がっている。この植物につき勝木先生に尋ねた所、何とムクゲ科植物(ハイビスカスの仲間)の *Sida fallax* だという。この花にはウラベニウラナミジャノメ *Xoix sesara* もよく来ていた。一方、ここでは少数派のシルビアシジミは濃堇色のシソ科植物に来ることが多いようだ。集落に入り、



集会所に近づくと連れ、覚えの有る香りが漂い始めた。どこか近くにあるのだろうかと思いつつ、クロトン?の木に隠れるようにして花をつけていた高さ4m程のナンヨウアワダンを発見。みんなに紹介する。村の人にもこの植物の由来につき説明してもらったが、やはり移入植物である由。

5日は鍾乳洞を目指す。この日は行き道のすがら、バックロードが林の中に入った所で早くも学生さん1名が *P. schmeltzii* を見つけてくれた。やはりこのチョウは典型的な樹林棲息種のような。同時にやはり黒い衣装のルリマダラ類もこの辺から目立つようになる。沢の水量は今年3月に来た時より格段に少なく、足を水没させずに沢を横切れた。この日は鍾乳洞探検のツアーも来ていた。水量が少ない時期の限定企画なのだろう。最後の村を抜けて樹林帯へ入ったところでも時々 *P. schmeltzii* が顔を出す。静止してくれないため撮れない。やがて鍾乳洞の前へ到着した所で、私はこの周囲に残る事にする。樹林帯を往復するがチョウとの対面がどうしても出会い頭になってしまう。そこでこれなら川原で待っていた方が良さかと思ひ、鍾乳洞の前を左に進んで川原に陣取った。足場が良くないが仕方がない。それほど長い時間待つ事も無く、目標が飛んで来た。いかにも『私は *Papilio*』と主張するように、明瞭なチョウ道を川原の上に作って飛んでいく。日本の *Papilio* のうち本種に一番近い飛翔特性を持つのは前回紹介した通りカラスアゲハだろう。一瞬、川原へ置いた網の柄の青い部分に飛びつく行動も見せた。これは重要な知見である。飛ぶコースが判ってくると、相手が飛んでいてもカメラで捕捉し易い。絵的には見れたものではないが、情報としては貴重なカットをいくつか撮影する事が出来た。この川原ではその他、オオカバマダラやコモンマダラ類、ルリマダラ類も観察した。ただしこの日の帰りに乗った渡し船の中でビデオカメラを船底に溜まった水の中に落とし、これ以降マニュアルフォーカスが効かなくなってしまった。ただし録画は出来ていたので最悪の事態は回避。6日は終日、勝木先生と行動。午前中の登り道ではボロボロになってもまだ一応威厳?を保っている石灰岩をよじ登るなどし、嘗て集落があったとされる林内の広場で昼食。ポメロの木が大爆生で大量の実が落ちている。残念ながら時期が悪かったのか枝に残っている実はなく、賞味する事は出来ず。食後はここからやや

東(上流側)に移動しながら山を降りる。途中でオオコウモリの軍団に出くわしたが、この後、少し下がった林の中で勝木先生が指導を入れていた時、学生さんが『アゲハらしいのが飛んでいる』と教えてくれた。最初はマダラカリユムラと思ったが、よく見たら確かにアゲハ。これはやはり証拠として採集しようかと考えた所へ UPS の学生が『あそこに飛んで来たぞ!』と教えてくれる。指示された場所を見たら、何と東京近郊でカラスアゲハ、モンキアゲハ、クロアゲハ等の好観察地として著名な湘南平(神奈川県大磯町)等で良く見られる『常緑樹林の中にぽっかり空いた、林床まで光が届く小空間、』そのものが彼の指先に展開している。これはいけると思ったが、近づいてみたらこの部分に木が生えていなかったのは、今にも大陥没を起こしそうな孔有り罅有り突起有りの石灰岩の為で、隙間に足を落とそうものなら生きて帰れなくなるかも知れない程の足場の悪さである。更にはこの瞬間にもこの周囲の岩が全て崩落し、私はその中に埋葬されてしまうかも知れない。同行者は誰も気付かなかったようだが、昆虫採集では目標が確実に採れそうだとしたら、こうした場所へも踏み込む覚悟が必要だ。ただしこの島では東南アジア等でより深刻になる『生物的危険』を殆ど意識なくて済むのは有り難い。アプローチ直後の一振りは失敗したが、もう少し先には何とかある程度、足を安定させられそうな場所があったので、そこまで移動し、さっきの個体が通り過ぎた飛翔コースの真下に網を構える。そこへ注文通り出てくる目標。

自分から網の中へ飛び込むように急降下した所を下から搦り上げ、見事採集。貴重なデータとなった。目的の違うメンバーと一緒に歩いている場合、自分の採集の為にみんなを長時間待たせることが出来ないのが辛い所だが、今回は休憩時間内に作業を終わらせる事が出来た。この後、ここから少し下がった所で *Micromelum*(右図)を数本確認。更に林道が樹林から草原に飛び出す僅か手前で、群生しているシソ科植物に数名のアゲハチョウが吸蜜に来ているのを確認。ここが今のところ、纏まった数のアゲハを



一度に見た村落から一番近い場所となる。後で判った事だが、この樹林は鍾乳洞付近の樹林とほぼ連続しているようで、ここに粘り込めば♀チョウも見れる可能性があると確信した。

7日も同様に行動。この日のコースは3月に来た時にも途中まで歩いたが、今回はあちこちで *Micromelum* の、それもそこそこの大きさの木を見つけることができた。これも地元のガイドさんにこの土地での名前や利用方法、良く見られる場所を尋ねたが『この木の葉の煮汁は喉の痛みに利く。林の中にあるのでいつでも採りに来れる』ということで、やはりこの植物は自生種らしい。自生だったら集落に植える必要もなく、この点、集落内に植えられるナンヨウアワダンは、やはり自然には入手できない外来種なのだろう。この日はもう1種のフィジー特産チョウに出会えた。それは朝方、自動車道から林道へ入る少し手前で遭遇したフタオタテハ属のチョウである。ただし残念ながら飛んでいた場所が木陰でまともな絵にならず、採集して撮影しようとしたら失敗したので、明確な証拠を残す事は出来なかった。

9月8日: USP- WINDER 先生との会談

今回の旅行でもこの日から私は2日半、別行動となる。この日は09:25にクロウズネストの前を通るリゾートバスでスバに行く予定で、08:40にはスタンバイ以外の道でバスを待っていたのが、09:10にほんのちょっとした時間建物の中に入った隙にバスに出られてしまったらしい。ちょうど来ていたINOKEさんが隣のホ

テルまで連れて行ってくれる事になったが、どうもそこには予約客が無かったようでバスは通過、INOKEさんも途中で道を間違えたため完全アウト。そこで約束の14:00にはまだ4時間以上あるから普通急行バスでも大丈夫と踏んでINOKEさんにシンガトカのバスターミナルへ送ってもらう事にしたが、何とシンガトカ川の手前のバス停で、たった今ターミナルを出たばかりのスパ行きバスとすれ違ってしまふ。ターミナルには09:30に到着したが、次のバスは10:00らしい。適当に時間を潰しバスに乗車。出発は10:10だったが、始めのうちは乗る予定だったリゾートバスに比べてちょうど1時間遅れで済んでおり、これなら13:00前後にはスパへ到着出来ると安心。料金もスパまで7.5FJDと予算の半分なのは有り難い。ところが途中のナブアで本線から遠く外れたバスターミナルへ入ってしまい、ここで遅れが1時間20分に拡大、更にスパに近づくに連れて客の乗降が増えた為、増々遅れが増大する。結局スパのバスターミナルへの到着は13:35。ここで今度はタクシーを探すのに手間取ってバスターミナルを出たのは13:45。ちなみに乗ったタクシーはトヨタクラウンコンフォートタクシー仕様車で、日本時代の勤務先会社名『大和』の表記と黄緑色地に橙色帯の外装は元より、車内の日本語表示板に至るまで全て日本で働いていた時のまま(ただしメーターのみフィジー仕様に交換済)だったのには感動した。USP入構後も建物がよく判らず、学生その他に訊きまわって建物の前でタクシーを降りたのが14:00。先生の部屋へ転がり込んだのは14:05だった。

まずは自己紹介だが、有り難い事に、机の上に4月に送ったオリジナルプロモーションビデオ『アゲハは口で甘味をみる』『アゲハ類の産卵行動研究-1』が置いてあったので、この制作者ですと挨拶。WINDER先生と一緒に話を聞いてくれたフィジアン先生もそれを聞いて感激してくれた様子。次に、冒頭で紹介したHPの情報元の『フィジーとロツマのチョウ』のリコピーがあるというので、アゲハの部分のみ、更にリコピーしていただいた。その後は話はトントン進み、フィジーだけでなくバヌアツ、ソロモン、果てはサモアまで夢は広がったが、やはり相手の一番の関心事は予算らしい。これが深刻な事は私にも判るが、ただチョウの研究に関しては、今のフィジーや南太平洋諸国の状況を見ると、まずチョウの観察の仕方をしっかりすることの方が、金を確保するより先のような気がする。この点、面と向かっていた時にうまく言えなかったのが心残りだが、これはまたメールその他で指摘しようと思った。また本格的にDNA関連の研究をやるとなったら、私の職場以外の知人にも声を掛けて一緒にやるつもりと提案。最終的には、南太平洋のチョウの生物地理を扱ったオリジナルビデオを作りたいねという相手の提案を最後に14:50、今回は時間切れ終了。その後、時間がとれるなら下の標本室を見ていけと言ってもらう。管理人の方が撮影しても良いというので、

チョウと若干のガの標本を撮影。1920年～1930年の標本というのも貴重だが、それ以上に重要なのは保存されていた標本のいくつかは、明らかに外部から迷い込んで来た可能性の有る個体だということだった。フィジーで記録されたチョウの種類数は冒頭紹介のHPによると44種だが、これが常時発生している種の数か、採集されたチョウ全体の数なのかは、はっきりさせる必要が有るようだ。標本箱の中には昨日撮影し損ねたフタオタテハ類の標本も数体あった。なお作業中に管理担当の方から『お前さん何て名だ?』と聞かれた。『INOUEだ』と答えたら『残念、俺の知っていたのはINOKEだ』とボケられた。



15:30に退室、ゲート付近で構内から町へ戻ろうとしたタクシーを拾い、ホリデイインへ送ってもらった。

9月9日: クラエコパーク 遂に♀チョウに会う!

この日は予約していたバスに余裕で乗車。乗り心地はやはり昨日のバスに比べて良好だが、どうも暑い。節約の為にあまり冷房を強くしていないのかと思ったが、窓が全て固定式なので、これは辛い。何故か出発直後からバスの運転手がしきりに車両の具合を気にしている。特に走行には問題ないので何だろうと思っていたら、エアコンがいかれたと言い出した。フィジアンリゾートに交換車両を持って来させるのもう少し我慢して欲しいとの事。クロウズネストで降りる私には恩恵無し。ホテル前には20分遅れの10:05に到着。車から降りて目の前の海を見て一驚する。何と、この前みんなが海で観察会をやっていた時より、更に潮が引いている。前夜は満月だったので、ちょうど大潮に当たっているためだろうが、問題は時間で、本来干潮は日出時と日没時になる筈である。それが4時間以上も経ってそろそろ満潮時刻も近いこの時間帯にこんなに潮が引いているとは誤差があるにしても大き過ぎる様に思った。部屋は準備できているからどうぞと通してもらえる。一番上の2号室だった。装備を最小限調整してすぐにクラエコパークに向け出発。

11:00頃に到着していつもの様に園内一周した後、件の花壇に張り込む。職員の方々も私の目的を完全に理解しているので、手隙の時にはアゲハの見張りを手伝ってくれる様になった。おかげで♂チョウの訪花行動の絵を数カット追加。今まで見た限りでは、このチョウは青い花に積極的に来る様で、この点、赤い花に集まる他地域の *Papilio* 達とはやや違う。尤もこれは、この島には真っ赤な花が少ないからというだけのことかも知れない。4~7日にガリマーレ地区で見たのと同様、日陰と日向の境界線上を飛び回り、その周囲にある花で食事をする。この日射境界線は時間によって移動するから、チョウの飛行コースも連動して変化する。この特性が判ってから、予めチョウがやってきそうな花を予測して張り込み、注文通り出現したチョウをばっちり撮影できるようになった。ただしチョウがいる場所は暗いのにその背景は日光直射、或いはその真逆の事態(右図)が多発し、光量調整が非常に難しい。特にアゲハ類は吸蜜中でも翅を動かしながら花序の上を歩き回るので、なおのこと苦勞する。逆に言えば、こうした映像が撮れる事が、このチョウの本性を示しているとも言える。間合いに時々園内を歩き、*Micromelum* や *Schefflera vitiensis* の名札をつけた木がないか探すが、こちらは成果無し。一方、7日に確認し損ねたフタオタテハ類が上空を飛ぶのを目撃。やはりここは大した場所だと思った。

こうしてほぼ丸1日張り込んだが遂にこの日も♀チョウは出現せず。そうそう簡単には会ってくれないなと思いつつ15:00、ホテルに戻るべく出入り口に向かって歩き出したが、正午前後に職員の方が『こんな所にもアゲハが来ている』と教えてくれた、観察路から外れた鳥舎の裏手で、外の道路に面した比較的日当たりの良い花のところにもう一度行って見た。あれ1名来ているな、念の為このチョウも撮影しようとビデオスタート。ところがファインダー越しにこのチョウ(次図)を目視した瞬間、私は



『これは!?!』と思った。採集して確認しようとザックに入れておいた網を取り出す。ただし柄は持って来なかったもので、届く範囲は腕の長さ分だけになる。突然広がった網に相手は殺気を感じたのか、金網の外＝施設外にいったん逃亡。残念、だめかと思ったが、そのチョウは余程お腹が空いていたのか直ぐに元の花へ戻ってきた。今度こそと思ったが、チョウもその点は抜きなく、ちょうど自分と私との間に障害物があるような花を選んで着地した。この場所からでは網を振っても間木が邪魔になって恐らく振り逃がしてしまう。チョウの側に回り込もうとしたらチョウは私に向かって飛んできてしまった。まずい!!と思い、元の位置へ戻ろうとしたら、今度はそのチョウは私と鳥舎の間をすり抜けて広い方へ出ようとした。これで万事休す…と思った次の瞬間、信じられない事が起こった。今の今迄うまい具合に私を翻弄していたそのチョウは、この一番肝心な時に、自分の翅を鳥舎の金網に引っかけてしまったのである。じたばたしているチョウにそっと捕虫網を被せて怪我をさせないように気をつけながら金網から外し、網の外に取り出してお腹を見たら思った通りもの見事に♀チョウ。かなり飛び古して、もうお腹には卵が残っていないようなので、証拠物件?としてはむしろ好都合だった。それにしても、この余りにも非・劇的な採集記には感動を通り越して、一抹のシラケムードが漂ってしまった。何はともあれこれではっきりした事は、このクラエコパークの谷は単なる *P. schmeltzii* の通過コースではなく、確実な生息域であると言う事だ。この点をまず WINDER 先生に連絡し、クラエコパークの職員さんと一緒にこの谷筋の植物を徹底的に洗えば、必ずこのチョウの幼生期の他に関する情報が得られるだろう。なおなぜこの谷筋にも *P. schmeltzii* がそこそこの密度で分布しているのかについては、佐藤先生が、海岸沿いにガリマーレ付近とは別の由来の石灰岩地帯がある可能性を指摘された。この点についても将来的には調べてみたいものと思っている。ただいずれにせよ、この付近の植生の現状から考えると、ここの個体群はガリマーレ付近の個体群とはほぼ完全に切り離されていて、ここで多数のサンプルを一度に採集した場合、その後の発生にもろに影響する可能性がある。そうでなくても、ここは既に海岸沿いの他の地域では絶滅してしまった生物たちの正に最後の砦となっている感があり、今後の調査の際にはこの点を十分踏まえなければならないだろう。

夕刻、この2日間の経緯につき萩谷先生に電話で詫び入れ+報告、10日は予定通りモキャンボ入りし、以後は寺阪氏他と同一行動。11日は帰国便が遅れたため空港 20:05 発のつくば行き終バスに乗り損ね、一旦東京駅まで出てつくば行きに乗り換えるという苦行?を強いられたが、とにかく同日深夜に宿舎へ帰還。

次回は…

WINDER 先生から頂いた資料には、*P. schmeltzii* の観察地として HP で紹介されていた地名に加え、Korolevu と NananuIRa という場所があった。このうち前者はシンガトカ川の最上流域であり、流石にここまで行けば原生のミカン科植物も残っているだろうから、本種の幼虫その他も発見できそう。しかし実際に行くと道の状態も不安であり、更に1人だけの趣味?に学生さんたちや地元の方を連日付き合わせるのは躊躇われる。更に勝手を言わせてもらえば、現場での調査開始時刻は何とか 09:30(可能ならば 09:00)からにしたい。チョウの種類にもよるが、彼等も自分達独自の時間割を持って活動している為、それを外すと目的の行動が全く観察できなくなる可能性があるためである。よって次回の私の FIJI での活動は、(同調してくれる方が居れば別だが)日本-FIJI 往復と、カバ式への参加以外は完全単独行動となりそうである。なお 2007 年 9 月は、私は日本-ポーランド-フランスと学会を飛び歩く事になり、9月に学生さんたちの実習が実施された場合、それには参加できない。悪しからず。